

1930), ツルサイカチ族¹²⁾, ミヤマトベラ族 (本田: 日本種子植物分類大綱 1955) などがある。この連の基準属は *Dalbergia* L. で、これに対する和名もハネノミカズラ属やツルサイカチ属 (牧野・根本: 日本植物総覧 1925) がある。これらは台湾産の *Dalbergia rubiginosa* Roxb. にツルサイカチ, ハネノミマメ, ハネノミカズラの和名がある (牧野・根本) ことに由来する。この植物が日本の出版物に発表されたのはおそらく Matsumura & Hayata, Enum. Pl. Formos. 113 (1906) が最初であり、それには和名がなく、標本として S. Nagasawa in 1904 が引用されている。この標本は 東大資料館にあり、ハネノミマメの名がある。その後台湾総督府民政部殖産局 (川上滝彌): 台湾植物目録 (1910) にはツルサイカチ, ハネノミマメが使われており、松村: 帝国植物名鑑下巻 顕花部後編 (1912) や早田: 台湾植物総目録 (1917) にはハネノミカズラの名が採用されている。したがって *Dalbergieae* の和名としてはハネノミカズラ連またはツルサイカチ連を使用するのがよいと考える。今日それを変更してミヤマトベラ族とする必要もないように思われるので、*Euchrestae* の和名はミヤマトベラ連としておきたい。

○マユハケゴケの秩父産を確認する (水島うらら) Urara Mizushima: Chichibu as a verified locality of *Campylopus fragilis*

マユハケゴケはもと群馬県赤城山産の標本に基いて設けられた *Campylopus akagiensis* Broth. et Yas. の和名であった。桜井久一博士は「日本の蘚類」(1954) にその産地として赤城山の他に伊予と武州秩父を挙げておられる。その後高木典雄氏は同種をヨーロッパや北米等に分布する *C. fragilis* の異名とされた。(服部研報 30: 240, 1967)。この時氏は *C. akagiensis* の副基準標本を検討された結果、これは *C. fragilis* であり、その日本における唯一の産地であると書いておられる。氏は桜井博士の報告の基となった伊予産の *C. akagiensis* の標本も調べたが、これは同じシッポゴケ科に属する *Dicranodontium denudatum* と *Brothera leana* の混合したものであったと報告しておられる。東京都立大学牧野標本館には桜井博士によって *C. akagiensis* と同定された標本があり、伊予産のものは高木氏の言われる通りである。秩父産の標本は二点あり、一は永野巖氏採集の大滝村大血川太陽寺産のもの、他は前田禎三氏採集の大滝村大除谷 (オオヨケダニ) 産のものである。前者は葉の横断面で厚膜な細胞は大形薄膜な背腹の細胞間に散在しており *Brothera leana* である。後者では葉脈の部分は暗く、その横断面における厚膜細胞は集って葉背に偏在しており、葉身細胞の形や無性芽の性質も合せ考えると明かに *C. fragilis* である。従って桜井博士が *C. akagiensis* として挙げられた秩父の産地はこの大滝村大除谷として確認されたことになり、*C. fragilis* の本邦における産地は現在のところ群馬県赤城山と埼玉県秩父郡大滝村大除谷の二ヶ所である。 (府中市 [])